OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	<書籍紹介>京都漆器工芸協同組合編　京漆器 : 近代の美と伝説　1983年　光琳社
Author(s)	佐藤, 敬二
Citation	デザイン理論. 1984, 23, p. 111-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52598
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書籍紹介

京都漆器工芸協同組合 編

京 漆 器 ——近代の美と伝統——

1983年　光琳社

京都漆器工芸協同組合は，京都市工業試験場の全面的な協力のもとに，各編集委員，実行委員の努力のもとに，昭和53年春よりすすめて来た近代京漆器総覧編さん事業の集大成として，「京漆器　—近代の美と伝統—」を刊行した。

全国の漆器産地にさまざまな影響を与えてきた京漆器は，明治・大正・昭和にわたる近代の製品や，材料・工具・技術情報などが次第に散逸するため，それらを収集記録しておく必要が生じて来た。編集委員会・実行委員会の第１の仕事が史料の収集であった。５年の歳月をかけて，各地の美術館，図書館，資料館，大学や旧家，道具商に蔵する京漆器の名品の撮影，意匠及び材料・工具・技術の調査をした結果，約 600点，カット数にして約1200点の製品写真とその他数多くの文献資料が集められた。今回それらをまとめ発刊の運びとなった。数多くの美術工芸関係の図書が出版されている中で，日本の代表的な産地を，特に近代の漆工芸に絞り，これだけ多角的かつ系統的にまとめあげたものは他に例を見ないものと思われる。

体裁はＢ４版で，200ページオールカラー図版 424点と論文 140ページから成る本編，24ページのカラー図版を含む 144ページから成る資料編，の２冊より構成されている。

本編図版は次の９編から成っている。

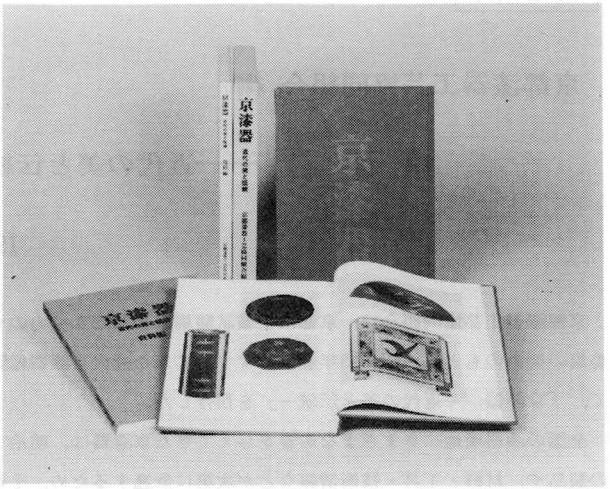
Ⅰ．近代の流れ—幕末から明治中期にかけ，近代京漆器の基盤を築いた木村表斎や富田幸七，佐野長寛などの作品。その後活躍した迎田秋悦，意匠の近代化に努力した浅井忠・杉村古香や神阪雪佳の漸新な作品など，近代漆器の意匠の流れを50点紹介。

Ⅱ．現代の動き—現代の京漆器業界の代表的な製品，京都市や京都府の行政指導による新しい試み，現代漆工作家の意匠傾向など41点を紹介。

Ⅲ．室内と家具—漆塗の贅をつくした，資料として貴重なヤンマー記念館の室内装飾をはじめ，各種船舶の内装パネルや衝立，棚，卓などの家具20点を紹介。

Ⅳ．調度品—料紙文庫や硯箱，加留多箱，碁笥，広蓋，香盆，三宝，火鉢など象彦や美

濃屋，三上揚光堂といった漆器店の製品を中心に72点を紹介。



Ⅴ．雛道具―三井家より八坂神社へ奉納された，三木表悦・三木玉真共作の超豪華雛道具一式を14カットで紹介。

Ⅵ．食器―煮物椀，吸物椀，膳，向付，懐石，皆具，重箱，喰籠，高杯，盃洗，花月台，菓子器など，作家や漆器店の製品を95点紹介。

Ⅶ．茶道具―水指，棗，香合，盆，炉縁，花生など中村宗哲，飛来一閑，鈴木表朔らの製品48点を紹介。

Ⅷ．神祇調度―京漆器業界が納めた，伊勢神宮御装束神宝や祇園祭山鉾工芸品など19点を紹介。

Ⅸ．作家の動向―佐野長寛，鈴木玉船，木村表斎，富田幸七など物故作家から現代作家まで，62人の作家の代表作62点を紹介。

本編論文は次の５編から成っている。

Ⅰ．「近代のなかの京漆器」　京大教授　吉田光邦

明治維新後の京都の工芸，勧業政策と各種博覧会における京漆器全般について，次のような項目で述べられている。

一、明治の変革

(1)新時代への対応　(2)勧業政策の進展

二、第四回内国勧業博

(1)京漆器の実状　(2)京都の動き

三、博覧会と海外市場

(1)万国博の刺激　(2)第五回内国勧業博　(3)海外市場の問題

四、大正の時代

(1)産業と工芸　(2)工芸と海外

五、昭和の時代―二十年まで

(1)大礼記念と京都　(2)博覧会の変化　(3)戦時体制のころ

Ⅱ.「近代デザインの流れ」　兵庫教育大学教授　日野永一

幕末から現代までを四期に分け，京漆器業界と京漆器のデザインについて，京都の各種工芸研究団体の工芸運動，工芸デザインの流れの中で，次のような項目で述べられている。

一、幕末から明治中期まで

(1)幕末の京漆器　(2)明治維新と京都工芸界の衰退　(3)京都美術協会と工芸振興

(4)京都美術工芸学校漆工科の創設　(5)第四回内国勧業博と奨美会

(6)業界の活動と漆工青年会

二、明治後期・大正期

(1)京漆園の人々　(2)佳都美会と神坂雪佳　(3)産業としての京漆器

(4)美術工芸に向けて

三、昭和前期

(1)京都工芸団体の動向　(2)帝展工芸部と京漆器　(3)戦時下の京漆器

四、昭和後期

(1)戦後・新造形への試み　(2)新しい生活様式と漆器

Ⅲ.「京都漆器業の推移」　地方産業史家　貫　秀高

明治以降，昭和五十年代初期までの京都漆器業の推移を，国内漆器業，主要産地の動向にもふれ，筆者の絶大な努力によって多くの統計資料を用いながら述べられている。

一、明治期

(1)明治初期～十年代　(2)明治二十年代以降　(3)生産と流通のしくみ

(4)輸出の貢献

二、大正・昭和前期

(1)大正期　(2)昭和前期　(3)他産地製品の移入　(4)行政施策と京都漆器業

三、昭和後期

(1)昭和二十～四十年代前半期　(2)昭和四十年代後半期以降

(3)生産と流通のしくみの変化

Ⅳ.「京漆器の技術」　京都市工業試験場工芸部長　山内　明

京漆器の製品分野はきわめて広く、多様な技法が伝承されている。京漆器の技術を木地作り，京塗り，加飾法の３つに分け，それぞれ詳細に，技法の特徴，工程，材料，道具などについて次のような項目で述べられている。

一、京漆器技術の概要

(1)京漆器技術の発祥と特徴　(2)京漆器の生産形態

二、京漆器の木地作り

(1)指物木地　(2)曲物木地　(3)挽物木地　(4)乾漆木地

三、京塗り

(1)京塗りの概要　(2)透明系塗漆法　(3)堅地系塗漆法　(4)薄塗系塗漆法

四、京漆器の加飾法

(1)京漆器加飾の特徴　(2)平蒔絵　(3)高蒔絵，研出蒔絵など　(4)地蒔

(5)漆絵，さび絵など　(6)青貝，螺鈿

Ⅴ．「図版解説」　漆芸家　水内杏平

前述の図版，Ⅰ．近代の流れ50点，Ⅱ．現代の動き41点，Ⅲ．室内と家具20点，Ⅳ．調度品72点，Ⅴ．雛道具一式14カット，Ⅵ．食品95点，Ⅶ．茶道具48点，Ⅷ．神祇調度19点，Ⅸ．作家の動向62点について１点づつ，製作技法，特徴，寸法などについて解説を行なっている。またミニ用語解説，手箱と棗の形状と各部の名称についての解説も行なわれている。

資料編は，多様な技法が伝承されている京漆器の製作工程，材料，工具，技法などの写真による解説と，本書の編さんのために収集した史料のうち，特に重要と思われるものが別冊の資料集として提供されている。

「京漆器の材料・工具・技術」図版と解説は工業試験場が資料収集，撮影，編集，解説を担当した次の４つの項目に分けて図版解説を行なっている。

Ⅰ．木地については　〈板物木地〉〈湯曲げ木地〉〈鉋目技法〉〈挽物工程順序見本〉〈挽物木地〉〈乾漆素地〉について解説。

Ⅱ．塗漆については　〈漆〉〈精製材料〉〈木地着色剤〉〈塗漆材料〉〈本堅地呂色塗工程〉〈塗漆技法〉〈刷毛おろし〉〈塗漆用具〉〈漆こし〉〈塗漆見本板〉について解説。

Ⅲ．蒔絵については　〈蒔絵筆〉〈蒔絵材料・用具〉〈平蒔絵工程見本板〉〈高蒔絵工程見本版〉〈研出蒔絵工程見本板〉〈肉合研出蒔絵工程見本板〉〈蒔絵技法〉について解説。

Ⅳ．青貝・螺鈿については　〈原貝〉〈摺り貝作り〉〈へぎ貝作り〉〈青貝技法〉〈螺鈿技法〉について解説。

「近代京漆器年表」　年表は京漆器の近代の流れを知る上で，重要なものであるが，収集した史料にもとづいて，工業試験場のスタッフを中心に作成された。

その他，貫氏の努力で収集された「近代京漆器経済統計・資料」。京漆器意匠や技術の流れを知る上で重要な，水内氏の手による「近代京漆器工人系譜」と「近代京都漆工商譜」。漆器業界の流れと密接な「京漆器関係組合規約・名簿」「漆工関連団体名簿」。最後に「復

刻資料」として，明治19年納富介次郎により編集された『府県漆器沿革漆工伝統誌』。京都府が明治30年４月，府下の物産の歴史と現状を調査した『京都府著名物産調』。黒田天外が京都を中心とした美術工芸作家，などの訪問談話をまとめた，明治32年刊の『名家歴訪録』，その他『日本漆工会報』の抜粋などが所載されている。

編集委員会が近代の意匠の流れの上で，収集候補に上げていた，農展図録に見られるような新しい意匠の作品が，それ程多く発見出来なかったのは残念であった。これらについては今後の調査に期待されるところである。

この「京漆器―近代の美と伝統―」は全国各地の漆器業界，工芸界にも反響が大であると聞いている。日本の漆工芸史の上で，近代京漆器の位置づけがなされたと同時に，今後の業界の進むべき道を示唆するものとして本書の持つ意義は大きいと思われる。

印刷，出版は光琳社。価格は本編38,000円，資料編 8,000円，合計48,000円

京都市工業試験場　佐藤敬二
（京漆器―近代の美と伝統―編さん実行委員）